平成２８年度　発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業
（通級による指導担当教員等専門性充実事業）
成果報告書

実施機関名（　大阪狭山市教育委員会　）

1. テーマ

発達障害のある子供に配慮した　授業づくり・集団づくり
ＭＩＭ指導の活用によるつまずきの早期発見と、どの子も理解しやすい指導方法の工夫

2. 問題意識・提案背景

平成 19 年度から専門家を交え「発達障がいをテーマとした実践研究会」を立ち上げ、全小中学校で事例研究を行う中で、教員の子供理解、課題早期発見の手立てや早期支援のあり方、指導方法の工夫改善等への意識が少しずつ高まってきた。

そして、平成 26 年度から文部科学省の「発達障害早期支援研究事業」の指定を受ける中で、どの子も理解しやすい指導方法の工夫に重点を置く一方で、児童・生徒の個々の特性に応じた個別指導を実践する体制づくりを行い、その子が本来持っている力を最大限引き出し、課題を克服できるよう取り組んでいるところである。この通級指導や個別指導を一層充実するためには、通級指導教室の指導担当教員の子供を理解する力と、個に応じた指導力の向上が欠かせないと捉え、本事業を受け担当教員の専門性向上の取組を進めることとした。

3. 目的・目標

(1)MIM と２つのチェックリスト（「文部科学省チェックリスト」と「2012 小野先生らによるチェックリスト」）に加えて、ビジョントレーニングや集中力トレーニング、ソーシャルトレーニングなどについての研究に取り組む。そして、通級指導教室での１時間の学習プログラムと、通常学級において全員で取り組めるトレーニングとの関連を図り、専門家による研修等を通して、すべての教員が通常学級の授業の中でも取り入れることができるようにする。

(2)市の通級部会で、検査器具類の使用についての研究に取り組み、子供を多面的に理解できるようにするとともに、検査結果を活かした指導ができるようにする。

(3)子供がリラックスできる場と学習を受け入れやすくする場の構造化に取り組み、学習環境を整備する。

(4)通級指導担当教員は、継続的に専門家による指導を受けながら、「教材づくり」や「検査器具類の使用」「効果的な指導や支援」等を行い、教員へ発信するとともに、PDCA サイクルで成果と課題を検証する。

4. 主な成果

(1) 発達障害支援アドバイザーの配置状況と活動内容について

元教諭で通級指導教室の担当経験がある２名の発達障害支援アドバイザーを配置した。

①＜主な活動内容＞

・各学校の通級指導教室及び個別指導教室の訪問指導（６７件）

・発達障害の可能性のある児童や保護者に対する相談・助言（３７件）

・通級部会・担当者会における専門性向上研修（９回）

・国事業運営協議会への参加（３回）

②＜専門性向上研修＞

６月　８日　通級指導教室の基本

９月　１日　「通級指導教室について」

９月１４日　粗大運動・微細運動について

１０月２６日　ＡＳＤの児童・生徒の指導

１０月３１日　ＡＤＨＤの子供の理解と支援について

１１月　９日　ＬＤの子供たちへの通級指導について

１２月　７日　「まちがい分析」

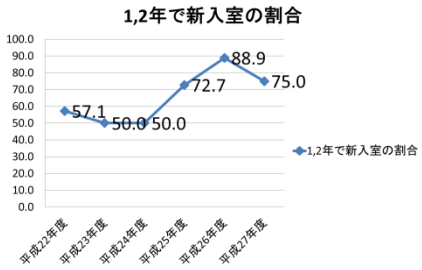
１月１０日　教育支援計画等の取組等の引継ぎ等について

３月１７日　ＣＡＲＤの理解と具体的な支援方法

発達障害やその支援等の理解を深めるため、８月２５日～２６日に国立特別支援教育総合研究所や筑波大学附属大塚特別支援学校へ視察を実施。

また、飯塚市より講師を招いてＭＩＭ－ＰＭの活用研修の実施や、他県（鳥取市・倉吉市）におけるＭＩＭの取組の視察も実施した。

以上の研修等により、通級指導教室担当教員の専門性向上につながった。



(2)通級指導教室へ新入室の割合の変化について

Ａ小学校における１，２年生での新入室の割合を見ると、近年では低学年での入級の割合が高くなっており、早期発見、早期支援につながっている。

5. 通級による指導における専門性のポイント

・一人ひとりの障害の状態を客観的に把握することができる。
（ＭＩＭ－ＰＭの結果による客観的な子供理解）

・個に応じた指導を通して、子供に自信をつけることができる。
（客観的な子供理解から、個に応じた教材・教具の提供）

・通級指導教室の効果的な運営ができる。
（子供とのつながりだけでなく、担任や保護者との連携）

・通常学級の授業において、どの子も理解しやすい指導方法の工夫へとつなぐことができる。
（子供の困り感とその対応について、その方策について提案することができる。）

6. 拠点校における取組概要

(1) 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究

発達障害支援アドバイザーによる研修において、アセスメントや指導計画について具体的な事例（立ち歩くことが多い児童・音読が苦手な児童）をあげながら、検討を進めた。また、発達障害の特性についても、研修の中で理解を深めることができた。

(2) 通級による指導の担当教員が通常の学級の担任との連携を深化させるための専門性の在り方の研究

通級指導教室では、時間の終わりに「本時の学習の記録」を記入し、担任や保護者とその時間の活動内容等について連携してきている。通級指導教室担当教員は、月に１度通級部会を開いており、継続的に専門家による指導を受けながら、「教材づくり」や「効果的な指導や支援」等について情報交換を実施し、担任との連携についても議論している。

また、各校の支援教育部会でも、定期的に通級の児童・生徒の入退室について情報を共有しており、そこでも担任との連携について研究を深めている。

(3) 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法の研究

発達障害支援アドバイザーによる研修において、発達障害の種類や特徴及びその対応についての研究を深めてきている。また、１時間の通級の時間にどのような活動をどのように組み合わせてすすめるかを個に応じて実践している。ＳＳＴについては、「お話しボックス」「お話しビンゴ」「絵カード」などを利用し、ＩＣＴの活用やＭＩＭの取組、さらに、体幹トレーニングや運動も取り入れ、自尊感情が育まれるよう日々実践について研究を続けている。

(4) 通級による指導における発達障害の状態に応じた各教科の内容を補充するための特別の指導方法の研究

空書き、タブレット、ノート、プリントなどその子に応じて、いろいろな方法を使って漢字を学習します。

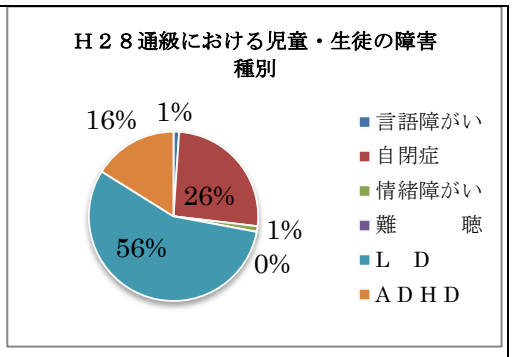
また、集中力を高めるために、時間を計って簡単な四則計算を実施したりします。中学校でも国語や英語等でカードやゲーム形式で個に応じて楽しく学べる工夫を研究しています。

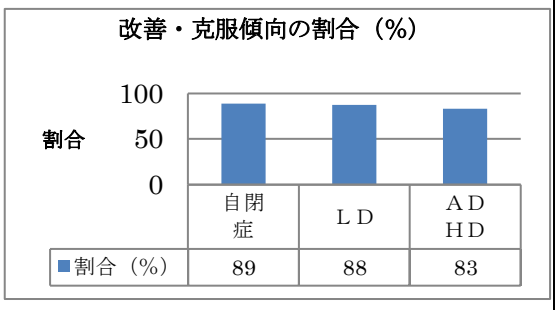
7. 今後の課題と対応

(1) 現状と授業改善

子供がリラックスできる場と学習を受け入れやすくする場の構造化に取り組み、学習環境を整備することは、進んできた。

また、通級指導教室の指導内容について研究を進めることにより、指導内容や施設設備が充実し、通級指導教室の効果的な運営につなげることができた。





具体的には、本市の通級指導教室における種別は、９８%が自閉症・ＬＤ・ＡＤＨＤであり、担当教員へのアンケートによると、通級指導教室へ入室後に課題を改善・克服傾向にある児童生徒が８割以上となっている。

また、指導方法の工夫についても、授業研究を進めてきた結果、「短時間構成の反復学習」が、子供の確かな学力を育む上で大切であると考えられる。そこで、個に応じたトレーニング法の研究をさらに進めていく必要がある。

(2) 小中学校間の指導の連続

これまでの国事業を通して、全小学校で早期発見・早期支援体制ができ、高学年になってから初めて通級指導や個別指導を受ける子供は減ってきている。反面、高学年になっても個別指導が必要な子供に対しては、中学校でも継続的に指導を行う必要がある。

現在中学校の通級指導担当者も交えて部会や研修会を実施し、指導内容がなめらかにつながるように取り組んでいるが、事業終了後は一層その連携強化を図りたい。そのためにも、発達障害支援アドバイザーを市単費で継続配置し、取組が一層広がるよう研究を推進する方針である。

(3) 教員の子供理解と指導力のさらなる向上

ＭＩＭ－ＰＭにおける成果のあった学級の様子から、「互いに認め合う雰囲気の学級づくり」「短時間の学習を効果的に取り入れるなどの工夫による集中させる授業づくり」「教室環境・授業の流れ・先生の話…がすっきりしている」の３つが特に大切で、これらを実践していく教員一人ひとりの指導力の向上が課題である。

「短いスパンの学習活動の組立て」や「通常学級におけるユニバーサルデザインを意識した授業づくり」については、支援教育や通級指導担当者を中心としながら学校全体に広がってきているが、本事業が終了後も各学校の担当者を集めた部会や学識経験者を招いた研修会を継続するとともに、教員の指導力向上や学校力向上に関する国や府の事業を積極的に活用し、さらなる研究に取り組みたいと考えている。

8. **拠点校について**（市内全７小学校）

指定校名：大阪狭山市立東小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	１４９	５	１３８	４	１３０	４	１３２	４	１２３	４	１３３	４
特別支援学級	５		５		６		３		５		１	
通級による指導の対象者数	２		５		１０		５		３		２	
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	SC・SSW		その他首席	計
教職員数	１	１	３６	１	４		２	５	（２）		２	５２

指定校名：大阪狭山市立西小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	６２	２	６５	２	７５	２	７０	２	８７	３	８７	３
特別支援学級	３		１		２		０		１		１	
通級による指導の対象者数	０		５		５		１		３		４	
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	SC・SSW		その他首席	計
教職員数	１	１	１６	１	４		１	２	（１）		１	２８

指定校名：大阪狭山市立南第一小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	５０	２	６３	２	４２	２	４８	２	４９	２	４５	２
特別支援学級	１				２		２		４			
通級による指導の対象者数			４		６		６		１		３	
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	SC・SSW		その他首席	計
教職員数	１	１	１９	１	２		１	４	（２）		１	３０

指定校名：大阪狭山市立南第二小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	８９	３	７５	３	９９	３	８４	３	８６	３	７４	２
特別支援学級	３						１				１	
通級による指導の対象者数	２		５		４		６		２		４	
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	SC・SSW		その他首席	計
教職員数	１	１	２１	１	３		１	１			０	２９

指定校名：大阪狭山市立南第三小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	３７	２	４７	２	３５	１	５２	２	４３	２	３６	１
特別支援学級			２		２		１		１			
通級による指導の対象者数	１		３		１		４		３		２	
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	SC・SSW		その他首席	計
教職員数	１	１	１１	１	２		１	１			１	１９

指定校名：大阪狭山市立北小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	８２	３	６８	２	６８	２	８５	３	６４	２	６７	２
特別支援学級	３		４		２		２		２		２	
通級による指導の対象者数	６		６		１		８		１		１１	
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	SC・SSW		その他首席	計
教職員数	１	１	１７	１	５		１	２	（１）		１	２９

指定校名：大阪狭山市立第七小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	９４	３	７１	２	９４	３	７３	２	８７	３	８８	３
特別支援学級			１		２		４		２		２	
通級による指導の対象者数	５		１０		３		５		２		３	
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	SC・SSW		その他首席	計
教職員数	１	１	１９	１	７		１	３	(1)		１	３４

（中学校）

拠点校名：大阪狭山市立狭山中学校											
	第1学年				第2学年				第3学年		
	生徒数		学級数		生徒数		学級数		生徒数	学級数	
通常の学級	１９３		５		２０２		５		１９３	５	
特別支援学級	９				４				６		
通級による指導（対象者数）	７				４				３		
	校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	特別支援教育支援員	スクールカウンセラー	その他首席	計
教職員数	１	１	２８	１	５		２	２	（１）	１	４１

<table>
<tr><td colspan="12">拠点校名：大阪狭山市立南中学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="2">第1学年</td><td colspan="2">第2学年</td><td colspan="2">第3学年</td><td colspan="2">第3学年</td><td colspan="2">第3学年</td><td colspan="2">第3学年</td></tr>
<tr><td colspan="2">生徒数</td><td colspan="2">学級数</td><td colspan="2">生徒数</td><td colspan="2">学級数</td><td colspan="2">生徒数</td><td colspan="2">学級数</td></tr>
<tr><td>通常の学級</td><td colspan="2">１４８</td><td colspan="2">４</td><td colspan="2">１７２</td><td colspan="2">５</td><td colspan="2">１６６</td><td colspan="2">５</td></tr>
<tr><td>特別支援学級</td><td colspan="2">６</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">１</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">３</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>通級による指導
（対象者数）</td><td colspan="2">５</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">５</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">３</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td></td><td>校長</td><td>教頭</td><td>教諭</td><td>養護教諭</td><td>講師</td><td>ALT</td><td>事務職員</td><td>特別支援教育支援員</td><td>スクールカウンセラー</td><td>その他
首席</td><td>計</td></tr>
<tr><td>教職員数</td><td>１</td><td>１</td><td>２７</td><td>１</td><td>４</td><td></td><td>２</td><td>１</td><td>（１）</td><td>１</td><td>３８</td></tr>
</table>

9. 問い合わせ先

組織名：大阪狭山市教育委員会事務局

(1) 担当部署　　教育部　学校教育グループ

(2) 所在地　　大阪府大阪狭山市狭山一丁目 2384 番地の 1

(3) 電話番号　　072-366-0011（内線 811）

(4) FAX 番号　　072-367-6011

(5) メールアドレス　　gakkou@city.osakasayama.lg.jp

資料編

１．専門性向上研修会

写真は、市内の通級・個別指導教室担当教員に対する専門性向上研修の様子である。発達障害支援アドバイザーが、教員のニーズに応じたテーマで研修を実施した。研修により、通級指導教室の在り方や子供理解についてより専門性を深めることができた。

２．視察研修

視察研修では、国立特別支援教育総合研究所や、筑波大学附属大塚特別支援学校を訪問することができた。（Ｈ２８．８．２５～８．２６）国立特別支援教育総合研究所では、発達障害の児童・生徒に対する様々なツールが展示されており、参考となるものが多数あった。

また、筑波大学附属大塚特別支援学校では、実際に利用されている教材・教具についてわかりやすく説明いただいた。また、「根拠に基づく授業づくり」について講義をしていただき、授業づくりのヒントをいただくことができた。

この視察で学んだことは、参加した教員が内容をまとめ、各学校で報告会を行った。

３．【資料１】は、市内で通級・個別指導教室に入室している児童・生徒へ入室した成果につ

いて、平成２８年度末に以下のようなアンケートを取り、集計しまとめたものである。

【資料１】

		小学校	中学校
	アンケート内容	回答児童数 146	回答生徒数 26
①	自分のことを話したり意見を言ったりできるようになった。	119	18
②	友達や先生の話を聞けるようになった。	110	15
③	文を読むのが得意になった。	102	14
④	本を読むのが好きになった。	89	13
⑤	文字（ひらがな・漢字）が書けるようになった。	117	15
⑥	作文を書けるようになった。	81	11
⑦	計算がうまくできるようになった。	119	20
⑧	体を上手に動かせるようになった。	107	9
⑨	文房具を上手に使えるようになった。	104	9
⑩	友達と楽しく遊べるようになった。	117	9

小学校

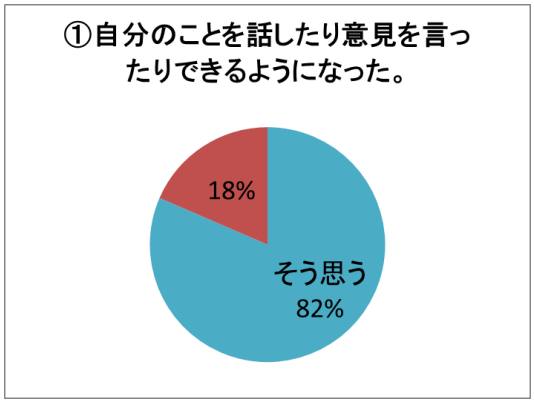


図１

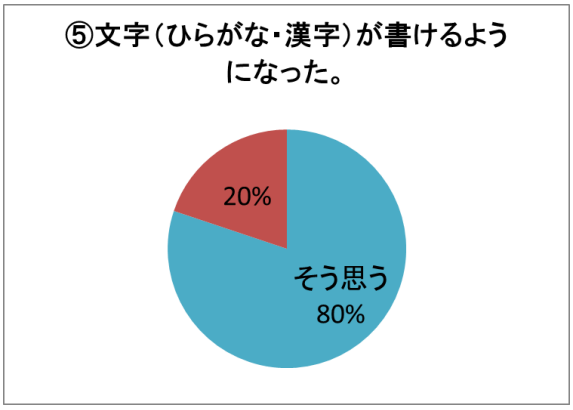


図２

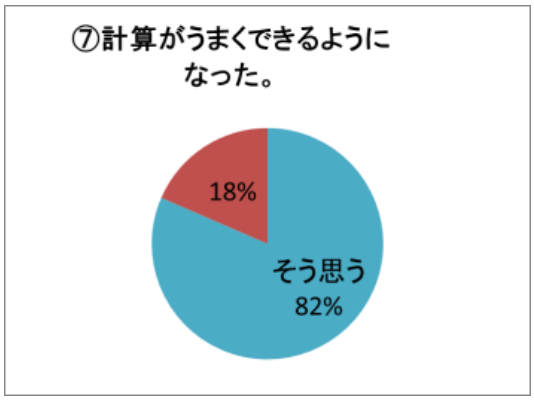


図３

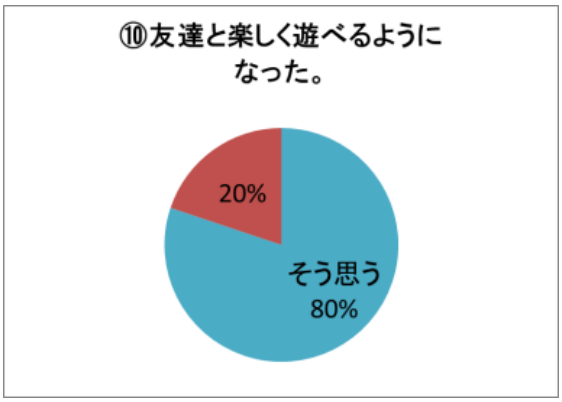
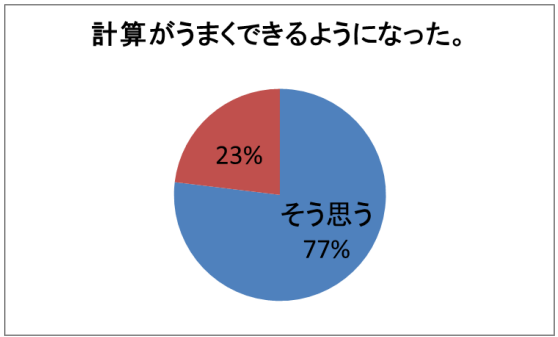


図４

中学校



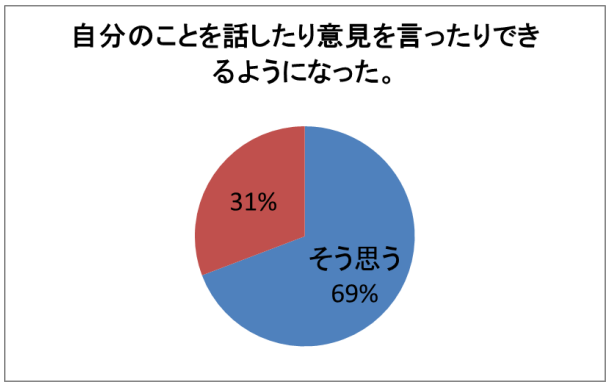


図　5

図６

【資料１】より、小学校においては、どのアンケート内容に関しても、児童が肯定的に回答しているのがわかる。その中でも特に、

①自分のことを話したり意見を言ったりできるようになった。

⑤文字（ひらがな・漢字）が書けるようになった。

⑦計算がうまくできるようになった。

⑩友達と楽しく遊べるようになった。

の割合が高くなっている。

小学校では、通級・個別指導を行うことで、担当教員が児童生徒の話を丁寧に聞き、児童生徒が話すトレーニングに継続して取り組み、成果を上げていること、また、読み書き、計算について、担当教員が、つまずいているところを的確に把握し、個に応じた適切な指導や支援を行っていることがわかる。また、「友達と楽しく遊べるようになった。」という回答も非常に高い割合となっており、通級・個別指導教室によるソーシャルスキルトレーニングが大きな効果を上げていることがわかる。

中学校においても、

①自分のことを話したり意見を言ったりできるようになった。

⑦計算がうまくできるようになった。

の回答が高くなっており、小学校同様に担当教員が児童生徒の話を丁寧に聞き、児童生徒が話すトレーニングに継続して取り組み、一定成果を上げていること、また、計算について、担当教員が、つまずいているところを的確に把握し、個に応じた適切な指導や支援を行っていることがわかる。ただ、小学校に比べて、肯定的な回答が少ないことから、早期発見、早期支援が大切であると感じている。

―今後の取組について―

通級・個別指導教室で、多くの児童生徒がアンケートの各項目についてできるようになったと回答している。

次期学習指導要領への移行にあたり、「聞く・話す・読む・書く」の指導の充実は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に欠かせない。

今後さらに、児童生徒ができる、わかる喜びを実感する体験を繰り返すことで、自尊感情を育み、自信を持って学校生活を送ることができるよう継続して研究を深めたい。